ISSN 2189-2652

英文学会誌

English Department Journal vol.48

第48号

宮城学院女子大学学芸学部英文学会
Miyagi Gakuin Women's University
2020年 3月

表紙デザイン：A scops-eared owl（羽角耳のあるフクロウ）木版
作者：Thomas Bewick（1753–1828）（英国の木版画家）
制作年：1791–1797（c）
初出：Ralph Bailby, *A History of British Birds*（1797）
サイズ：4.9cm×6.8cm
出典：A Collection Online. The Trustees of the British Museum.

英文学会誌

第 48 号

2020 年 3 月

目次

論文

英語の one 照応における不定代名詞 one の語法と統語特性に関するミニマリスト統語論的分析・・・・・ 3

増冨和浩

＊　＊　＊

学科イベント

英国写真展 Portrait of Britain ・・・・・・・・・・・・・ 24

英文学科生の活動

ESL（English Speaking Lounge）・・・・・・・・・・・・ 28

1 年　渡邊智咲　4 年　高橋あかり

海外長期留学報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

ハイデルバーグ大学　2 年　秋山沙耶香

ハイデルバーグ大学　2 年　匹田明花律

クイーンズランド工科大学　3 年　小野舞理彩

北アリゾナ大学　3 年　高橋里奈

イギリス研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

2 年　甲能万結　3 年　後藤菜奈子

CanCam Satellite Office 学生編集長 ・・・・・・・・・・ 41

3 年　永山果奈

ご退職に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

John Wiltshier

2019 年度英文学科活動報告

教員研究・教育活動報告・・・・・・・・・・・・・・・ 46

英文学科講義題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

英語英米文学専攻講義題目・・・・・・・・・・・・・・ 57

卒業論文題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

英文学会活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

English Certification －私の勉強法－ ・・・・・・・・・・ 66

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

2019年度　論文

英語の one 照応における不定代名詞 one の語法と統語特性に関するミニマリスト統語論的分析

増冨和浩

1. はじめに

本稿では、英語の one 照応における不定代名詞 one の特性について議論する。「1 つ」という意味をもつ one は先行文脈で使用された「a(n) ＋可算名詞」の代用として導入される。このため、(1a, b) の対比が示すように、不定冠詞との共起は認められない。また、（1c, d）の対比が示すように、先行文脈の名詞が不可算名詞の場合は one での代用は認められない。

（1） a. I need a pen. Do you have *one*?

b. *I need a pen. Do you have *a one*?[1]

c. Red wine goes well with meat dishes, and white (wine) is perfect with fish.[2]

d. *Red wine goes well with meat dishes, and white *one* is perfect with fish.

（1a）に対して（1b）が非文法的であるのは、不定代名詞 one が数に関して「単数」の解釈を有しているために、不定冠詞が加わった（1b）では、単数の解釈が重複することが余剰的と判断され容認されないという直感的な説明が可能かもしれない。一方、（1c）と（1d）の対比に関しては、one の先行詞が不可算名詞 wine であり、数に関する解釈の不一致の点から、one による代用が阻止されると説明できるかもしれない。

しかしながら、one にはこのような説明とは矛盾する興味深い事実も観察されている。特に、（2）では不定冠詞を伴う one 照応が容認可能である

[1]「＊」は生成文法において、非文法的であることを示す記号である。

[2]（1c, d）は綿貫・ピーターセン（2011）の用例を一部変更したものである。

が、これは（1b）が非文法的であることとは矛盾する事実である。

（2） This glass is dirty. Can I have *a clean one*?

（2）の例で注目すべき点は、不定冠詞と one の間に形容詞などの修飾要素が生じている点である。one 照応に形容詞を用いると、不定代名詞 one が普通名詞と同じ扱いとなり a(n) との共起が可能であることを示唆する記述的説明がある（綿貫・ピーターセン, 2011）。しかし、one が不定代名詞から普通名詞に転換することが実際に可能であるのかという疑問が残る。また、上述の数に関する解釈にもとづく説明との矛盾も未解決のままとなる。

以上の点から、本稿では、one 照応における one の特性は十分に解明されていないと考え、この点について再考を行うことにする。本稿の構成は以下のとおりである。次節ではまず、one 照応に関わる経験的事実を概観し、議論の対象となる問題点を明確にする。3 節では、本稿の議論の前提となる理論的枠組みを導入する。4 節では、one 照応における不定冠詞の容認可能性は、ミニマリスト統語論において用いられている素性に関する一致操作のメカニズムを用いて説明可能であることを示す。5 節は、本稿のまとめである。

2. one 照応に関わる経験的事実

言語運用においては、同一語句を複数回繰り返して使用する必要が生じることがある。英語ではそのような場合に、同じ表現の繰返しを避けるために、代名詞等の代用表現を用いることが一般的である。具体的にどのような代用表現を用いるかは、置き換えられる先行詞の種類などにより決定される。

（3） a. John$_i$ thinks that Mary likes John$_i$.

b. John$_i$ thinks that Mary likes *him*$_i$. （有元・村杉, 2005）

（3a）のように同一語句をそのまま用いることも可能であるが、（3b）においては、名詞句 John の代わりに人称代名詞 him が用いられている。この

とき、John と him の間に同一指示の解釈が可能であるが、そのことが同じ指標（下付き文字）により示されている。[3] このように、同じ語句の代わりに用いる表現は代用表現（あるいは代用形）と呼ばれ、英語においては he や they などの人称代名詞、himself や themselves などの再帰代名詞、each other などの相互代名詞のほか、（4）に示すように、不定代名詞の one や指示代名詞の that など、他の代用表現も用いられる。また、動詞句が代用表現により置き換えられる場合には、do や do so などが用いられる。本稿では、これらの代用表現のうち、不定代名詞 one を用いた場合の文法性に注目し議論する。

（4） a. John read a book$_i$ by James which was long and I read *one*$_i$ which was short.

b. The weather$_j$ in Kansas in 1985 was better than *that*$_j$ in 1936.

（今西・浅野, 1990）

なお、（3b）や（4）に示されるような先行詞と代用表現の間に成立する同一指示の意味関係は「照応」と呼ばれ、代用表現に one を用いる場合は「one 照応」と呼ばれる。3 節以降の議論の準備として、本節では、まず one 照応に関して先行研究等において指摘されている文法性に関わる特徴を概観する。

2.1. 単数可算名詞を先行詞とする one 照応

まず、単数可算名詞を先行詞とした場合の one 照応形に関わる文法的な特徴を確認する。

（5） a. Steve saw a unicorn$_i$, and I saw *it*$_i$, too. （有元・村杉, 2005）

b. Steve saw a unicorn$_i$, and I saw *one*$_i$, too. （ibid.）

c. *Mary wants to buy the pink truck$_j$ but she can't find *one*$_j$.

（荒木, 1996）

d. If you haven’t got fresh cream I’ll take tinned (cream). （Swan, 2005）

[3] 以下の議論でも i や j などの下付き文字を指標として使用する。

e. *If you haven't got fresh cream$_k$ I'll take tinned one$_k$. （ibid.）

例えば unicorn などの単数可算名詞が先行詞となる場合、代用表現として it または one を用いる可能性がある。（5a）は it が「the + 主要部名詞」の代用であるので Steve が見たものと同一のユニコーンを「私」が見たと解釈され、（5b）は one が「a + 主要部名詞」の代用であるため Steve と「私」がそれぞれ不特定のユニコーンを見たと解釈される。なお、one が「a + 主要部名詞」の代用である証拠は、定冠詞がついた先行詞を不定の解釈をもつ one で代用することはできないため、（5c）が非文法的であるという事実により確認される。さらに、（5d, e）の対比が示すように、単数の素性をもつ one は不可算名詞 cream の代用表現になることはできない。

2.2. 複数可算名詞を先行詞とする one 照応

one 照応は複数形の先行詞に対しても用いられ、その場合は ones の形態が用いられる。ただし、ones は単独では用いられず、ones の前か後かに修飾語（句・節）を伴う場合に用いられる（小西, 2011, p. 788）。

（6） a. "Which flowers$_i$ would you like?" "*The* *(*white*) *ones*$_i$, please."

b. I'm going to keep those boxes$_j$. *The ones*$_j$ *(*I want to get rid of*) are in the garage. （小西, 2011）

c. "Which books$_k$ are yours?" "*The ones*$_k$ *(*on the desk*)."

（6a）は形容詞 white が one を前置修飾する場合には文法的であるが、white を省略すると非文法的となる。（6b）は後置された関係詞節の限定修飾受けており、（6c）では ones が前置詞句により後置修飾されることで文法的である。これらの修飾要素を用いない場合は（6b, c）は非文法的となる。

2.3. one(s) と限定詞との共起関係

限定詞とは冠詞、所有代名詞、指示代名詞、数量詞等の総称であるが、本節ではこれらと one 照応の共起関係について確認する。まず、単数形の指示代名詞と one の共起は（7a）に示すように可能であるが、（7b）が示

すように、複数形の指示代名詞が用いられる場合は ones と隣接することは認められず、通例 ones が省略される。（小西, 2011; 今西・浅野, 1990）。なお、（7c）が示すように、複数形の指示代名詞が生起する場合でも、形容詞等の前置修飾部を伴う場合は容認可能となる。さらに、（7d）に見られるように、複数形の指示代名詞が ones と隣接する場合で、形容詞による前置修飾がない場合でも後置修飾要素が生起する場合は容認可能となる。

（7） a. “Which coat$_i$ is yours?” “*This one*$_i$ or *that one*$_i$?”

b. These books$_j$ are bigger than *those* (**ones*$_j$).

c. I knew the nodding pink flowers$_k$ of thrift, and *those white ones*$_k$ with the bulbous base must be sea campion. （*ODE*）[4]

d. “Which of the pictures$_m$ do you prefer?” “I prefer *those ones*$_m$ *over there*.” （小西, 2011）

定冠詞との共起に関しては、前述の例とも関連するが、定冠詞が単独で隣接する場合は、（8a）が示すように、one 照応の生起は容認可能とはならない。通例、（8b, c）の例のように one(s) の前後に修飾語を伴うことで one(s) と先行詞との照応関係が容認可能となる。

（8） a. “Do you want a doughnut$_i$?” “??Yes, I’d like *the one*$_i$.” [5]

（今西・浅野, 1990）

b. “Do you know the man$_j$ from Japan?” “No, I know *the one*$_j$ *from Spain*.”

（ibid.）

c. “I found these documents$_k$. Are they *the ones*$_k$ *you lost*?”

また、所有格形の限定詞に関しては、one 照応との共起は容認可能とはならず、（9）に示すように one(s) は省略される。

（9） a. I like Bill’s dog$_i$ and Mary’s (*one$_i$), too. （今西・浅野, 1990）

[4] *ODE* は *Oxford Dictionary of English* の略号である。

[5]「??」は容認性がきわめて低いことを示す。

b. Betty's cookies$_j$ are tasty, but I like Marie's (*ones$_j$) better.

（木塚・バーダマン, 1997）

一方、some や many など数量詞及び two や three など数詞との共起については、複数形の ones との共起は、（10a, b）が示すように、直接隣接することはできず、通例 ones は省略される。一方、形容詞的な修飾要素が介在する（10c）の場合は、one 照応の生起は可能となる。

（10）a. I like those doughnuts$_i$. I'll eat *several* (**ones$_i$*).

b. John has two books$_j$ and Jack has *three* (**ones$_j$*).

c. I have a large cup$_k$ and John has *two small ones$_k$*. （今西・浅野, 1990）

最後に、不定冠詞 a と one の共起に関しては、（11a）が示すように直接隣接する *a one の連鎖は認められない。一方で、本稿の冒頭で言及したように、one と不定冠詞の間に形容詞等の修飾要素が介在する（11b）の場合は容認可能となる点は興味深い。このことについては 4 節で詳しく議論する。

（11）a. "Have you got a camera$_i$?" "No." "You should buy *one$_i$* / **a one$_i$*.

（*LDCE*）[6]

b. "This glass$_j$ is dirty. Can I have *a clean one$_j$*?"

さらに、one が a と（見かけ上）隣接しても容認可能となる例が観察されている。これらの例は、（12）に示すように、不定冠詞と one 代用形が隣接する語順となるが、形容詞等の前置修飾部が不定冠詞に先行する位置に生起することで容認性は低下しないことが指摘されている。以下の例は、今西・浅野（1990）に引用された Jespersen（1927）の例である。

（12）a. The step no longer appeared *so questionable a one*.

b. The chance was *too good a one* to be lost.

c. Many a giddy and thoughtless boy has become a good bishop … but no

[6] *LDCE* は *Longman Dictionary of Contemporary English* の略号である。**a one* は本稿が追加した部分である。

such a one ever become a good general.

2.4. one 照応に関するその他の制限

前述の定冠詞との共起の際には修飾要素を伴う必要があることを示した。（13c-e）に示す例では with や in などを伴う前置詞句が後置修飾しており文法的である。一方、（13a, b）のように同じ前置詞句でも of を伴う例は非文法的である。この文法性の違いについては、それぞれの前置詞句と one によって置き換えられた主要部名詞との間の文法関係が問題となるという指摘がある（有元・村杉, 2005）。この指摘によれば、前置詞句が主要部名詞の補部（項）である場合は非文法的であり、付加部（修飾要素）となる場合は文法的となる。[7]

（13）a. *The student$_i$ of chemistry was older than *the one$_i$ of physics*.

b. *I met the king$_j$ of England and Sam met *the one$_j$ of Spain*.

c. The student$_k$ with long hair is dating *the one$_k$ with short hair*.

d. The boy$_m$ in that room is younger than *the one$_m$ in this room*.

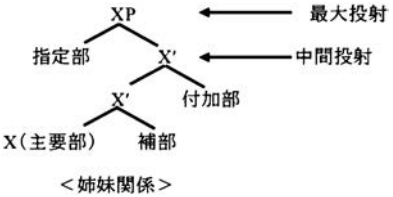
（今西・浅野, 1990）

e. The discussion$_n$ on Monday was better than *the one$_n$ on Tuesday*.（ibid.）

補部とは主要部に後続し主要部を補う要素で付加部よりも主要部と密接な関係にある。補部と付加部の区別がこれらの文法性に関係しているということは、生成文法の枠組みにおいては X バー構造において説明される。[8] 補部は主要部 X と直接結びついて構成素を形成している（姉妹関係）が、

[7] (13a-c) は、有元・村杉（2005）により Hornstein and Lightfoot（1981）、Lakoff（1970）および Radoford（1988）から引用されたものである。

[8] X バー構造における基本的事項を示すと次のようである。



付加部は 1 つ上の中間投射 X′ に付加している。このような構造的な近さの関係は、以下に示すような経験的事実とも合致する。(14a) が非文法的であるのは、補部と付加部という構造的階層が異なる要素を等位接続させることができないということを示している。これに対して、同じ構造的階層の要素を等位接続させた (14b, c) は文法的である。

(14) a. *a student of physics and with long hair (補部と付加部)

b. a student of physics and of chemistry (補部と補部)

c. a student with long hair and with blue eyes (付加部と付加部)

(牛江, 2000)

これらの点は、one 照応が名詞句 (NP) 内部の構成素 (N′) を one によって代用する(つまり one によって置き換える)という指摘とも合致する。(詳細は、有元・村杉, 2005 を参照のこと。)

2.5. 本節の要約と問題の所在：one(s) の素性について

以上、本節では one 照応に関わる文法性を概観した。one 照応の文法性には one(s) と共起する要素の種類が大きくかかわっていることを示した。中でも限定詞との隣接は非文法的であるが、修飾要素の介在がその文法性を改善することに重要な役割を果たすことを確認した。特に、不定冠詞が直接隣接する場合に one 照応は容認可能とはならないが、形容詞などの修飾要素が介在することで文法的となる事実は非常に興味深い。不定冠詞と one の隣接が不可能であるのは、不定冠詞と one の両方がもつ単数という性質 ([+sg]) が干渉することが非文法的であると直感的には予測される。しかし、(15) に示すように、形容詞的な修飾要素が介在したとしてもこの状況は変化していない。それにもかかわらず文法性が改善するという事実は、このような単純な理由では説明できない。

(15) a. *[$a_{[+sg]}$ [$one_{[+sg]}$]]

b. [$a_{[+sg]}$ [形容詞 $one_{[+sg]}$]]

本稿では、このような不定冠詞と one の共起に関する文法性がミニマリ

スト統語論の観点からどのように説明できるかについて次節以降で議論する。

3. ミニマリスト統語論における素性の一致について

本節では、次節での具体的な議論の前に、ミニマリスト統語論における基本的な統語構造の形成過程と、「数（の素性）」をはじめとする統語素性の扱い方（素性照合の方法）について確認することにする。[9]

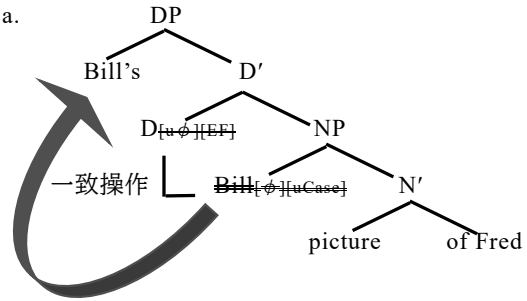
統語素性には、人称・数・性に関わる性質の集合体であるφ（ファイ）素性、名詞が担う格に関する格素性、そして文における主語の生起等を保証する周縁素性（edge feature：[EF]）などが提案されている。これらの素性には、具体的な値（たとえば、人称素性に対しての 1 人称 [pers 1]、2 人称 [pers 2] や 3 人称 [pers 3] など）が付与されていない状態と、値が付与された状態との 2 種類の状態があると考えられており、前者は「解釈不可能素性」（の状態）と呼ばれ、後者は「解釈可能素性」（の状態）と呼ばれている。解釈不可能素性は、解釈可能素性との一致操作（Agree）を通して統語構造の形成が終了するまでに値の付与（素性照合）を受け、その派生から削除されなければ、その派生は破綻する（非文法的となる）と考えられている。

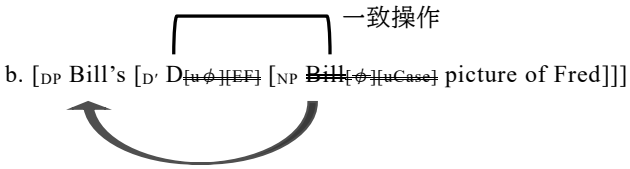
3.1. 名詞句内部の一致操作

ここで、議論を明確にするために、名詞句の派生を例として、統語派生の過程を確認しておくことにする。例えば、名詞句 Bill’s picture of Fred の構造は以下のようであると考えられる。（以下では、説明を簡潔にするために、本稿の議論に影響しない部分は簡略に示すことにする。）

[9] ミニマリスト統語論に関する基本事項の体系的な説明に関しては、Chomsky（2000, 2001, 2008）および中村・金子・菊池（2001）などを参照。

（16） a.





統語構造は、(16a) に示すように 2 つの要素を併合する（組み合わせる）操作を繰り返すことによって形成される。この構造において、DP は限定詞句（determiner phrase)、NP は名詞句（noun phrase）を表し、それぞれの句の特性を決定する D（冠詞など）や N（picture などの名詞）を主要部としている。[10]　また、各要素に付けられた括弧表示はその要素が有する素性を表しており、Bill は φ 素性と格素性 [Case] を有し、主要部 D は φ 素性と周縁素性 [EF] を有している。このうち解釈不可能素性は [u: uninterpretable] によって示すことにする。[11]

上述したように、解釈不可能素性は値を付与され削除されなければならないが、この過程は (16) の例では、主要部 D と Bill の間の一致操作 (Agree) により行われる。一致操作の具体的な手順として、構造上上位にある D

[10]（16）の構造では冠詞は生起していないが、このような場合も主要部 D は生起しているとされている。この説明は、音形のない（発音されない）冠詞が生起しているという説明と同義である。
[11] 厳密には、picture や Fred にも素性を示すべきであるが、現在の議論は直接かかわらないため省略することにする。

がどの要素が合致する素性を有しているかを探査し、同じφ素性を有するBillを発見する。その後、DとBillに一致操作が適用され、解釈不可能なDのφ素性に値が付与され削除されるとともに、Billの格素性には属格の値が付与されBill's となる。[12]　一方、Dなどの機能範疇の主要部が有する解釈不可能な周縁素性 [EF] については、値の付与ではなく同一の投射内（現在の例ではDP内）に一致操作での合致要素（現在の例ではBill）を移動させること（移動操作）によって削除される。（16a）においては、この移動過程は矢印で示し、移動後の要素には取り消し線で移動済みであること（その位置に存在しないこと）を示してある。以上の過程により、名詞句Bill's picture of Fredの構造が形成される。なお、（16b）には、（16a）の樹形図と同じ情報をラベル付き括弧表示で示してある。本稿では、紙面の都合上（16b）の表示方法を適宜用いることにする。

3.2.　一致操作と位相（Phase）および転送（Transfer）との関係

前節で、名詞句の統語構造が派生されるまでの過程を見たが、実際の文の派生においては、この後、形成された名詞句が動詞句の目的語になるなど派生はさらに継続される。このとき、一致操作や移動操作のほかにもう1つ重要な操作が必要となる。この操作は転送（Transfer）と呼ばれている。

（16）の派生はすでにやや複雑な過程を経ている。この後さらに派生が継続し、それらの派生をすべて記憶しなければならないとすると、脳（記憶）に対して過重な負担をかけることになる。我々は言語運用を行うたびに常にこのような負担を受け続けるとは考え難いというのが生成文法の一般的な考え方である。この問題を解決する操作が転送であり、転送は位相（Phase）を単位として以下のように適用される。なお、本稿では詳細には

[12] 名詞句の派生においては、一致操作の結果が形態的に確認されるのは、主要部名詞に先行する属格名詞句に付加された接辞（-'s）の生起によってか、属格形の人称代名詞の生起によってである。一方、文の派生においては、主語の名詞句と時制（tense）を担う主要部Tに一致操作が適用されるが、その結果は主語の主格形態（人称代名詞の場合）および3人称単数形の動詞の形態（is / was / V-(e)s）によって確認される。

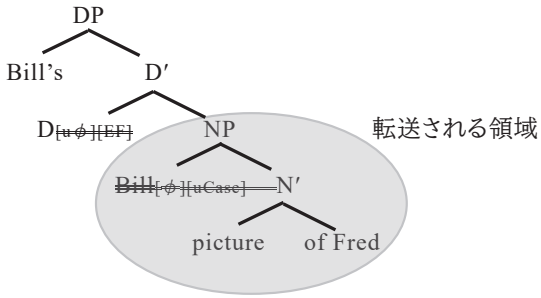
立ち入らないが、英語における位相は CP（節の最大投射）、v*P（動詞句）および DP（限定詞句）と考えられている。[13]

名詞句の派生が（16）の段階まで終了し DP が形成された時点では、DP 内で必要な操作は全て終了している。ここで、（17）にしたがって、DP の補部である NP が音（発音）と意味を処理する段階に転送される。

（17）　位相において適用可能なすべての操作が適用されると位相主要部の補部は転送される。　（外池, 2019, p. 11）

たとえば、（16）の構造における具体的な転送領域は、（17a）の網掛け部分および（17b）の矢印で示した部分である。

（18）a.



b. [$_{DP}$ Bill's [$_{D'}$ D[~~u φ~~][~~EF~~] [$_{NP}$ ~~Bill~~[~~φ~~][~~uCase~~] picture of Fred]]]

転送される領域

一度次の段階に転送された部分はそれ以降の言語処理からは除かれ（つまり記憶される必要はなく）脳にかかる負担が軽減されると考えられている。逆に言えば、一度ある構造についての音や意味が決定された後、さらにその構造に変更を加えることが可能だとすると、いつまでも発音や意味の確認ができず、言語運用が混乱してしまう。このような状況を回避する措置が転送であると考えられるだろう。

[13] DP が位相であるとする議論に関しては、大庭（1999, 2003）や外池（2019）などを参照。

次節では、本節で確認したこれらのメカニズムを用いて、one 照応における不定冠詞と代用表現の one が共起する場合の文法性について考察する。

4. 分析と帰結

前節までの内容を踏まえて、本節では one 照応における不定冠詞と one との共起に関わる文法性を示した（19）の対比について議論する。すでに確認したように、one と不定冠詞が隣接する（19a）は非文法的であるが、興味深いことに、不定冠詞と one の間に形容詞が介在する (19b) は文法的となる。本稿では、この文法性の対比が前節で確認した名詞句内部における素性一致のメカニズムの点から説明可能であることを示す。

（19）a. *I need a pen$_i$. Do you have *a one*$_i$?　（=（1b））

b. I keep two dogs$_j$, *a white one*$_j$ and *a black one*$_j$.

まず、*a one の連鎖が非文法的である理由を統語派生の点から確認する。すでに述べたように、one 照応は先行文脈の「a ＋主要部名詞（N）」を one で置き換えたものであることから、本稿では以下の構造に示すように、統語構造における one は a ＋主要部名詞として生起し、派生の終了後に音声的に one に置き換えたもの（発音したもの）であると考える。なお、以下の議論では紙面の都合で、統語構造の表示に関しては（16b）のラベル付き括弧表示を主に用いることにする。（19a）の場合、主要部名詞は pen であるので、派生の最初段階で不定冠詞が pen と併合し（20）の DP が形成される。この部分が派生終了後に one に置き換えらえる部分である。

（20）　$\underbrace{[_{DP}\ [_{D}\ a]\ [_{NP}\ pen]]}_{\text{one と発音される部分}}$

前節の派生のメカニズムにしたがって、この構造において、DP の主要部である不定冠詞は解釈不可能な ϕ 素性を持ち、主要部名詞 pen はそれに

適合する解釈可能な ϕ 素性を持つと考える。[14]　この構造において、前節で確認した一致操作が適用され、不定冠詞の解釈不可能な ϕ 素性に値が付与され、ここまでの派生の段階が適切となる。

(21) [DP [D a[~~u ϕ~~]] [NP pen[ϕ]]]

一致操作

この後、*a one（= a pen）を形成するためにさらに不定冠詞が併合され、(22) の構造が形成される。この構造においても、不定冠詞は解釈不可能な ϕ 素性をもっているため、 別の ϕ 素性をもつ適合要素との間に成立する一致操作を受けなければならない。しかし、ここで重要なことは、(22) には 2 つの DP、すなわち位相が含まれている点である。仮にそれぞれの DP を DP_1、DP_2 とすると、位相 DP_2 で必要とされる操作はすでに終了している。したがって、前節の（17）の仮定により位相 DP_2 の補部（[$_{NP}$ pen$_{[\phi]}$]）が転送され利用できなくなるため、DP_1 の不定冠詞の解釈不可能な ϕ 素性は、(21) の場合と異なり、一致操作を受けられないことになる。この結果、問題となる名詞句 DP_1 は解釈不可能素性を残したままとなり、*a one（= a a pen）の派生は非文法的であると説明される。

転送される領域

(22) [DP1 [D a[uϕ]] [DP2 [D a[~~u ϕ~~]] [NP pen[ϕ]]]]

次に、(19b) の a white one（= a dog）および a black one（= a dog）が文法的な派生となる理由を確認する。派生の途中の段階までは、前述の *a one（= a pen）の場合と同じであり、(23a, b) の派生過程をたどる。(23b) の段階で、DP_2 の不定冠詞の解釈不可能な ϕ 素性と主要部名詞 dog の ϕ 素性との間で一致関係が成立し、不定冠詞の ϕ 素性は値を与えられ削除される。その後、(23c) に示すように、DP_2 の補部の NP が転送され、主要部名詞 dog はその後の派生には利用できなくなる。

[14] 本稿では、格素性は N や NP ではなく、それらを含む DP（限定詞句）が持つ素性であると考えている。

(23) a. [$_{DP2}$ [$_{D}$ a] [$_{NP}$ dog]]

b. [$_{DP2}$ [$_{D}$ a[~~u φ~~]] [$_{NP}$ dog[φ]]]

一致操作

転送される領域

c. [$_{DP2}$ [$_{D}$ a[~~u φ~~]] [$_{NP}$ dog[φ]]]

これ以降は *a one の場合とは異なり、現在検討中の派生では、引き続き DP_2 と形容詞 white および black が併合され（24a）が形成される。さらに、次の段階で不定冠詞が併合されることで、DP_1 の構造が形成される。（下の構造において、網掛けで示した部分は転送後の領域を示す。）

(24) a. [$_{DP2}$ white / black [$_{D}$ a[~~u φ~~]] [ ]]

b. [$_{DP1}$ [$_{D}$ a[u φ]] [$_{DP2}$ white / black [$_{D}$ a[~~u φ~~]] [ ]]]

(24b)においては、新たに併合された不定冠詞が解釈不可能な φ 素性をもっているため、派生が収束するためには、合致する φ 素性をもった要素とともに一致操作を受けることで、この解釈不可能素性が値を付与され削除なければならない。しかし、DP_2 の主要部名詞はすでに転送されているので、一致操作の適用を受けることはできないため、このままでは（19a）の場合と同様に（24b）の派生も破綻すると考えられる。そこで、本稿では次の仮定を導入することにする。

(25) 形容詞は φ 素性をもち、解釈不可能な φ 素性をもつ要素と一致関係を成立させることができる。

このような仮定を妥当と考える根拠の 1 つとして、同じゲルマン語起源のドイツ語からの知見が重要である。現代英語においては、形容詞は数や人称といった素性に対して語形変化を示さないが、ドイツ語では共起する名詞の数、性、格によって形容詞の語形が変化する。たとえば、(26a, b) の

主要部名詞 Buch（中性・1 格）に対して、それが単数か複数かの違いによって形容詞 dick の語形が変化している。本稿での議論に基づけば、この事実は形容詞と主要部名詞との一致操作の結果であると説明することができる。

（26）a. ein *dickes* Buch　（1 冊の分厚い本）

b. drei *dicke* Bücher（3 冊の分厚い本）

つまり、ドイツ語では形容詞も ϕ 素性をもち、ϕ 素性に関わる一致操作に参加すると考えることができる。さらに、生成文法おける言語普遍性の観点に立てば、語形変化は伴わないが、ドイツ語同様に、（25）に示すように英語の形容詞も一致操作に関わると考えることは一定の妥当性があると考えられる。したがって、（27）においても、不定冠詞の解釈不可能な ϕ 素性と形容詞の ϕ 素性に一致操作が適用され、不定冠詞の ϕ 素性に値が付与され削除されると考えられる。この結果、すべての解釈不可能素性が削除されたことで、派生が適正に収束し、a white one および a black one は文法的であると説明される。

（27）$[_{DP1}\ [_{D}\ a_{[\cancel{u\phi}]}]\ [_{DP2}\ \text{white / black}_{[\phi]}\ [_{D}\ a_{[\cancel{u\phi}]}]\ [\ \text{[redacted]}\ ]]]$

一致操作

以上により、*a one が非文法的であるのに対して、a white one および a black one が文法的であるという、one 照応に関わる文法性の問題は、ミニマリスト統語論における一致操作の点から説明可能であると考える。

本稿の議論の最後に、one 照応における不定冠詞と one の共起に関し、（12）の例で示したもう一つの経験的事実について、（28）として再掲し確認する。

（28）a. The step no longer appeared *so questionable a one*.

b. The chance was *too good a one* to be lost.

c. Many a giddy and thoughtless boy has become a good bishop … but no

such a one ever become a good general.

（28a-c）は、上述した（19b）と同様に文法的である。異なる部分は、修飾要素と不定冠詞の語順であり、（19b）の a white one および a black one では、形容詞が不定冠詞と代用表現の one の間に生起しているのに対して、（28）の例では、修飾要素と不定冠詞の語順が逆転しているために、見かけ上不定冠詞が one に隣接している点である。（19a）では、*a one の連鎖が非文法的であることをφ素性の一致操作の点から説明したが、（28）の例でもこの問題となる連鎖が含まれているにもかかわらず so questionable a one などは文法的な派生である点が興味深い。先行研究においては、不定冠詞は前置修飾部がそれに先行する位置を占める場合に one 照応と隣接しても容認可能となる（今西・浅野, 1990）と記述されているが、容認可能となる理由には触れられていない。

本稿では、（28）に示すような例もφ素性の一致操作のメカニズムの点から説明可能であると考える。つまり、（28）の基本的な派生過程は、（19b）の a white one および a black one の場合と同様であるが、何らかの理由で不定冠詞と形容詞の位置関係が逆転する段階が派生の中に含まれていると分析する。このような分析にとって重要な点は、各語彙項目（単語）が担う素性の組み合わせであると指摘しておきたい。現在のミニマリスト統語論の枠組みでは、各語彙項目は派生に導入される時点で、どのような素性を担うかが随意的に決められる。[15] 本稿では、このことが不定冠詞と修飾要素の語順の逆転にかかわっていると考える。

[15] 例えば、平叙文あるか疑問文であるかなど、文の種類は節構造の最大投射である CP(complementizer phrase) の主要部 C（補文標識）によって決められると考えられているが、この主要部 C の持つ素性は（ia）平叙文の場合と（ib）疑問文の場合とでは異なっている。（下記は現在の議論に必要な素性のみを示している。）

(i) a. [−Q], [−wh]

b. [+Q], [+wh]

ここでは、あまり細かい点には立ち入らないが、このように、同じ主要部が持つ素性の組み合わせも派生に導入される時点で異なる場合がある。

以上の点に注意して、（28a）の so questionable a one を例として議論する。（29a）に DP_1 の主要部として生起する不定冠詞のもつ素性の組み合わせを示す。（29b）は派生の途中段階を示しており、DP_1 の不定冠詞の解釈不可能な ϕ 素性と形容詞 questionable のもつ ϕ 素性が一致操作を受けた段階を示しており、（27）に示した a white one および a black one の派生の最終段階と同様である。ただし、so questionable a one の場合は、（29a）のように DP_1 の不定冠詞が周縁素性 [EF] を持って派生に導入されると考えると、派生がさらに続くという点が a white one および a black one の場合と異なる。

（29）

a. [uϕ], [EF]

b. [$_{DP1}$ [$_{D}$ a~~[uϕ]~~[EF]] [$_{DP2}$ so questionable[ϕ] [$_{D}$ a~~[uϕ]~~] [ ]]]

一致操作

3.1. 節で確認したように、周縁素性は一致操作の相手となる要素をそれ自身の投射の指定部に移動させる。現在の例では、DP_1 の不定冠詞は questionable と ϕ 素性において一致操作の適用を受けているため、DP_1 の不定冠詞の周縁素性 [EF] は questionable を DP_1 の指定部に移動させることで削除される。その際、副詞の so は questionable の修飾要素として共起しているため、この移動に随伴されて DP_1 の指定部へ移動され、（30）の構造を形成する。この結果、so questionable a one の語順が生成され、見かけ上 one と不定冠詞が連続するが、一致操作の点からは派生は適正に終了しており、文法的な統語構成物であると判断できる。

（30）

[$_{DP1}$ so questionable [$_{D}$ a~~[uϕ][EF]~~] [$_{DP2}$ ~~so questionable~~[ϕ] [$_{D}$ a~~[uϕ]~~] [ ]]]

以上のように、ミニマリスト統語論の ϕ 素性に対する一致操作の点から

one 照応における不定冠詞と one の共起に関わる文法性が正しく説明できることを確認した。

5. まとめ

本稿では、英語の one 照応が示す文法性を概観した上で、不定冠詞と代用表現の one が共起する場合の文法性に関する経験的事実について、ミニマリスト統語論の観点から分析を行った。議論の結果、one 照応における形容詞の生起が、不定冠詞と one が共起する場合の文法性に関して重要な役割を果たしていることをφ素性に対する一致操作のメカニズムにより説明した。

参考文献

荒木一雄（1996),『現代英語正誤辞典』, 研究社出版, 東京.

有本將剛・村杉恵子（2005),『束縛と削除』, 研究社, 東京.

Chomsky, N. (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, N.（2001）“Derivation by Phase,” *Ken Hale: Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, N.（2008）“On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by R. Freidin, C. P. Otero and M. L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

今西典子・浅野一郎（1990),『照応と削除』, 大修館書店, 東京.

木塚晴夫・ジェームズ・バーダマン（1997),『日本人学習者のための米語正誤チェック辞典』, MACMILAN LANGAGEHOUSE, 東京.

小西友七（2011),『現代英語語法辞典』, 三省堂, 東京.

中村捷・金子義明・菊池朗（2001),『生成文法の新展開』, 研究社出版, 東京.

大庭幸男（1999）「Phase としての名詞句表現」『言語研究の潮流―山本和之教授退官記念論文集―』, 稲田俊明他（編）, 21-36, 開拓社, 東京.

大庭幸男（2003）「特定性効果とフェイズ不可侵条件」『市河賞 36 年の軌跡』言語教育研究所（編）, 202-210, 開拓社, 東京.

Swan, M.（2005）, *Practical English Usage*, Oxford Univ. Press, Oxford.

外池滋生（2019）『ミニマリスト日英語比較統語論』, 開拓社, 東京.

牛江一裕（2000）,「構成素性と句構造（1）構成素構造のテストと X バー理論」『人文・社会科学』49 (1), 埼玉大学教育学部, 37-50.

綿貫陽・マーク・ピーターセン（2011）『表現のための実践ロイヤル英文法』, 旺文社, 東京.

Portrait of Britain

Portrait of Britain

副手　木川　奈緒

2019 年 10 月 15 日から 11 月 7 日まで、イギリスをモティーフとした写真展「Portrait of Britain」が、英文学科企画として本学礼拝堂ラウンジにて開催されました。企画書には次のように記されています。

> 英国をモティーフとした写真展 Portrait of Britain を開催します。1886 年の宮城女学校（本学の前身）創立以来、英国の言語や文学、歴史や文化は、学びや研究の対象の一つであり続けています。英文学科では、1985 年より教育課程に海外研修を取り入れ、今日に至るまで毎年実施しています。本展では、今夏の英国研修時に、各地で出会ったさりげない風景をとらえた写真を中心に展示します。名所旧跡とは違った、英国の日常の雰囲気を感じとっていただければ幸いです。
>
> 2019 年 10 月
>
> 宮城学院女子大学学芸学部英文学科

＊

私は以前から写真を趣味としており、また、個人で短期留学や旅行で度々訪れるなどしてイギリスに大変な魅力を感じていたので、いずれイギリスに関する写真を発表する機会が欲しいと思ってきました。その中で今年度から英文学科の副手に着任し、さらにイギリス海外研修の引率に参加する機会をいただきました。そこで、今夏、イギリスの魅力をより多くの人に伝えることができる良いチャンスではないかと思い、展示を開催させてい

ただくこととなりました。

今回撮影する中で意識したことは、敢えて名所旧跡とは違った景色を選ぶことでした。私は特にイギリスの人々の生活や、観光地ではない路地裏などに魅力を感じ、その中でも特にロンドンの若者文化に高い関心を持っていたので、そういった側面を人々に知ってほしいとカメラを構えました。

私は日頃から SNS や映画、雑誌などからロンドンの情報を取り入れてはいましたが、実際に現地に赴くと、人々の生活が以前より 180 度変化していることに驚きました。街の中心がどんどん観光地となる一方で、若者の意識がそこに固執したくないとばかりに中心部から郊外へと移り変わっているようでした。そういった変化を今回の研修で感じ、主にそこから写真へのインスピレーションを得ることができました。

このことから、地球の反対側で人々がどういった景色を見て、どういった生活を送っているのか、展示した写真から感じ取っていただけていたら幸いです。

同時に、海外研修に一緒に参加した学生も撮影し、彼女たちの充実した日々の様子も展示しました。本学英文学科を象徴する海外研修と、活き活きとした笑顔の学生の様子から、英文学科の魅力を存分にアピールすることができたのではないかと思います。

また、イギリスと関連して茶のイベントも合同で開催しました。日替わりでイギリスのフレーバーティー（持ち帰り用）と水出しティー（飲食用）を展覧会会場に設置し、来場者に様々なイギリスの茶を味わっていただく場を設けました。本学卒業生で、現在紅茶教室を主宰している古山くみさんにもご協力いただき、吉村先生と合同でイギリス茶文化の話と紅茶のおいしい淹れ方の講演会も開催し、イギリス尽くしの 3 週間となりました。

この場を借りてご来場してくださった皆様や、ご協力いただいた古山さん、展示をするにあたりご理解をいただきました英文学科の先生方、また、全面的にご指導をいただきました吉村先生に、深く御礼を申し上げます。

Brick Lane, London にて撮影

Notting Hill, London にて撮影

2019 年度
英文学科生の活動

ESL（English Speaking Lounge）

ESL を利用して出会えた自分

1 年　渡邊　智咲

私は、英語をネイティブスピーカーのように流暢に話せるようになりたいと思い、ESL を利用しています。最初のころ、間違えることが怖くまた単語や表現が分からず途中で黙ってばかりいました。しかし、そのままでは成長しないと思い、何て言えばいいか分からなくなってもとりあえず声に出す、意味に近い単語に置き換える、先生に英語でどう表現するのか質問するなど、黙らないようにすることを心がけました。

こうして ESL をたくさん利用するうちにボキャブラリーや話せる量が増え、先生の質問にもすぐに返せるようになりました。また、授業が分か

Patrick 先生と ESL で話す渡邊さん（写真左）

りやすくなり、先日行った国内研修では、外国人のスタッフさん達とたくさん会話をすることができました。

ESL を利用していなければ、自分はあまり英語を話せないままだったと思います。2 年生、3 年生になったら海外研修に行きたいので、そのためにも ESL を利用してもっと自分の英語力を高めていきたいです。

Thanks to ESL…

4 年　高橋あかり

私は英文学科に入った時から、留学することを目標にしていました。その夢が叶って 3 年次の後期にイギリスへ短期留学をすることになり、それを見据えて英会話のスキルを向上させておきたいと思い、ESL に通い始めました。実際に、ESL で身につけた英語独特の言い回しは、留学先で出

Yoshiko 先生と ESL で話す高橋さん（写真左）

会った人々との交流で役に立ち、話題の幅が広がったことで、誰とでも英会話を楽しめるようになりました。また、帰国後も ESL に通い続け、英語で考えたり会話したりする習慣を継続することで、身につけた感覚を維持することができたと思います。初めのうちは英語を聞き取れなかったり、簡単な事しか言えなかったりしたのですが、今ではスピードの速い英語も理解できるようになり、自分の意見や考えをしっかりと伝えられるようになりました。卒業後も何らかの形で英語の会話力をさらに向上していけるよう、努力し続けたいと思います。

海外長期留学報告

私の留学生活

2 年　秋山沙耶香
ハイデルバーグ大学（アメリカ）
（2019.8.26–2020.5.12）

私が現在留学をしているハイデルバーグ大学は、アメリカのオハイオ州の小さな町に位置する自然豊かな大学です。バスや電車等の交通機関はあまり発展していませんが、毎日の様に、キャンパス内ではイベントが開かれ、楽しく過ごすことができます。また留学生の数が圧倒的に少なく、生きた英語に触れる機会が多いという点で、留学する場所としては非常に適した場所だと考えています。現地の学生との寮生活も魅力の一部です。私は、現在アメリカ人の生徒と一緒に生活をしていますが、お互いの文化を教えあい価値観を共有し合いとても良い関係を築けています。

前期は、英語力強化に重点を置き計 4 つ授業を履修しました。Listening や Reading など 3 つの授業は留学生用の少人数クラスでしたが、唯一、

Writing のクラスは現地の学生向けの授業であったため、私にとっては非常に大変でした。周りにはネイティブしかいない状況で、最初は先生が何を話しているのか、また何をすればいいのかさえ全く理解できず、いかに留学に向け準備をしてこなかったかということを、毎日の様に痛感していました。しかし友達や先生方のサポートを受ける中で、徐々にではありますが授業にもついていける様になり、確実に成長を感じています。後期は Writing に加え、Literature 等の学部学生が受ける授業を履修する予定でいます。より一層頑張りたいと思います。

最後に、ハイデルバーグ大学に留学して本当に良かったと日々実感しています。こちらに留学をしてからは、日本ではできない様な経験をたくさんさせてもらい、日々刺激を受けながら生活しています。英語力だけでは

ルームメイトと部屋の飾り付けをした際に撮影した写真（本人左）

なく人としても成長できていると感じます。残りの留学生活、家族や友達、先生など、私と関わってくれている全てのひとたちへの感謝を忘れずに過ごしていきたいと思います。

留学生活を経て

2 年　匹田明花律
ハイデルバーグ大学（アメリカ）
（2019.8.26–2019.12.19）

私は、アメリカオハイオ州にあるハイデルバーグ大学で約 4 か月留学しました。大学入学前から海外留学は一つの目標であり、英語力の向上と異文化を学びたいと思い、留学を決意しました。私にとってこれが初めての海外生活であったため、アメリカに到着してからは、毎日さまざまな異文化を発見しとても新鮮な生活を送りました。しかしそれと同時に、はじめは他の留学生の英語力に圧倒され、簡単なあいさつでさえもスムーズにできず、コミュニケーションが思うように取れませんでした。

私が受けていた授業は、reading、listening & speaking、living in America といった留学生の授業と、literature の現地生と一緒の学部授業の計 4 つです。留学生用の授業は、4 から 6 人の少人数でアットホームな環境で学習できましたが、学部の授業では留学生は私一人で、授業についていくのに必死でした。アメリカの授業は、多くの日本の大学の講義形式とは全く異なり、学生も積極的に手を挙げ自分の意見をはっきりと述べます。私はこの違いにとても驚きました。学部授業では自分から発言することは難しかったですが、留学生同士の少人数授業では、少しずつ自分から発言できるようになりました。

授業以外にも、毎週 2 回、現地にいる日本人小学生の学習サポートをし

ました。教育についても興味がある私にとって、とてもよい経験となりました。他にも日本についてのプレゼンテーションや、各種団体が運営するイベントへの参加、運動部の試合観戦など、この大学でしか経験できないことを楽しむことができました。楽しい経験も苦しい経験も、このハイデルバーグ大学を選んだからこそできたことです。今後はここでの学びを活かし、さらなる英語力の向上に励むとともに、国際的な広い視野を持って生活していきたいと思います。

コーヒーアワーにて修了証書をいただいた記念に先生と

たくさんの人との出会いを通して得たもの

3 年　小野舞理彩
クイーンズランド工科大学（オーストラリア）
（2019.03.25–2020.2.4）

現在私は、オーストラリアのクイーンズランド工科大学（QUT）に約 1 年間交換留学をしています。英語が飛び交う環境で生活して英語を日常的に使えるようになりたい、様々な国の人々と関わり世界に目を向けたいという思いから、多民族国家で知られるオーストラリアへの留学を決意しました。

前期は、英語の基礎力を高めるために QUT の語学学校で学びました。授業では主に毎週変わるトピックに関して討論したり、自分の国についてプレゼンをしたり、リスニングやリーディング、文法問題を解いていました。上級クラスに入ってからは、ABC News を聴いて内容を把握したり、お題を見てそれについて 2 分間英語で話し続けるなど、よりレベルが高く実践的な授業でした。後期からは、EAP2 という QUT の大学院へ進学するために必要な英語力をつけるためのコースで学んでいます。このコースでは、特に英語の読み書きに力を入れていますが、毎日英語で討論する時間があり、グループでのプレゼンも毎週あるので、ディスカッションの能力と人前で英語を話す力をつけるためにとても良いコースです。留学生活で一度も日本人と同じクラスにならなかったため、友達のほとんどが外国人です。日本語が通じない環境で過ごす友人達との時間は、私の英会話力を伸ばす特に大きな要因となったと感じています。

オーストラリアに来た当初は、自分の積極性の無さと英会話力の低さに落ち込むこともありましたが、周りの目を気にせず思ったことを言う習慣をつけたところ、授業中の英語での討論にもついていけるようになりまし

た。日本文化や日本語に興味ある友人が多く、覚えたての日本語を披露してくれたり、日本を旅行した時の思い出を楽しそうに語ってくれたりして、とても嬉しかったです。そんな友人達や親切なホストファミリーのお陰で、安全に楽しく留学生活を送ることができました。この経験を活かして将来は、日本に留学している外国人留学生の力になれる仕事に就きたいと考えています。

North Stradbroke Island で台湾人の友人と（本人右）

アメリカ留学を経験して

3 年　高橋　里奈
北アリゾナ大学（アメリカ）
（2018.8.20–2019.5.16）

2 年生の 8 月から約 10 ヶ月間、アメリカのアリゾナ州にある北アリゾナ大学に留学しました。現地では、留学生が多く集まる寮に住み、アメリカ人とスリランカ人がルームメイトでした。一緒に買い物や料理をしたり、英語のレポートの添削をしてもらったり、2 人との寮生活はとても過ごしやすかったです。

授業は語学学校の試験をパスしたため、全て現地の生徒と同じ内容を受けました。自分で自由に授業を組み、興味がある分野や自分のレベルに合いそうな授業を取ることができます。私は、前期はアメリカ文学や言語学など英文学科らしい内容が中心の授業を選びましたが、後期は中国語や政治学にチャレンジしました。課題がとても多く、平日は毎日夜中まで課題をやる日々が続きましたが、成長できるチャンスだと思い、自分を奮い立たせ、自分なりに真剣に取り組みました。

留学中は、日本のことを客観的に見て紹介する機会が多かったです。それと同時に私は、日本や世界の国々についての知識が足りないと実感しました。外国人の友達は、日本の文化や歴史などに興味を持ち知ってくれているのに、私は相手の国のことをあまり知りませんでした。そこで、もっと世界の国々への視野を広くして世界各国の人々と友達になりたいと考えるようになり、できるだけたくさんの留学生が集まるイベントに参加することにしました。様々な国の人に自分から話しかけることを心がけ、相手の文化を理解しようと行動しました。

アメリカ留学を経験して、英語力はもちろん文化理解力やコミュニー

ケーション力を身に付けることができました。この経験は、北アリゾナ大学で学んだからこそ得られたものであり、将来、私の力になってくれると思います。今後は、これらの能力を生かせる職業に就くことを目標に就職活動を頑張りたいです。

仲の良かった友人と（本人中央）

イギリス研修報告

イギリスで触れた文化や価値観

2 年　甲能　万結

はじめに、私がイギリス研修に参加しようと思った動機と理由についてお話します。私には小学生のころから行ってみたい国がありました。それがイギリスです。ハリー・ポッターが大好きな私は、物語の舞台になって

いるイギリスに対して強い憧れを抱くようになりました。

現地では平日の午前は語学学校、午後と休日は研修プログラムやフリータイムとなっていました。語学学校では自分のレベルに合わせたクラスに振り分けられ、私のクラスには欧米人からアジア人まで様々な国の生徒がいました。授業はそうした生徒 8 ～ 10 人に対して、先生ひとりで進められます。イギリスでは、疑問に思ったことや自分の意見は次々と積極的に発言しなければいけませんでした。先生は生徒の質問に沿って授業を進めていきます。これは、私が今回の研修中で最も大変だと感じたポイントです。日本で育った私にとって、自分から発言をしたりほかの生徒の意見に異論を述べることは、決して簡単ではありませんでした。しかし同時に、

ハリーポッターミュージアムにて

語学学校での経験を経て学んだこともたくさんありました。私は、自分の学力がクラスのレベルに合っていないと感じ、クラスを変えてもらおうと思っていることを、クラスメートのひとりに相談したことがありました。その時に、学力よりもいかにそのクラスでいろいろな国の人と文化に触れて学べるかが大切だと言われ、この時、相手が自分の意見をこんなにもはっきりと言えることに驚きました。

私が、今回のイギリス研修で得た最も大きなものは、クラスメートや現地の人との交流です。クラスメートには、授業中にわからないところがあれば何度も助けてもらい、電車で隣に座った男性には、ロンドンのおすすめの場所を教えてもらいました。たくさんの優しさに触れて、イギリスでの 3 週間を充実した楽しいものにすることができました。今回の経験から、いつか自分ひとりの力でイギリスをもう一度訪れたいなと思っています。

研修を通して得たもの

3 年　後藤菜奈子

イギリス海外研修を通して、何か新しい発見をしたい、成長したい、そう思い今回の研修に参加しました。初めてのホームステイということもあり、私の英語力で、訪れたことのない場所で本当にやっていけるのだろうか、という不安もありました。しかし、イギリスについてすぐに、ホストマザーが迎えに来てくださり、私が滞在したウィンブルドン周辺のこと、イギリスの歴史や暮らしなど多くのことを教えてくださり、会話をしていくうちに、不安も薄れていきました。はじめは、自分の言いたいことを英語にすることが難しく、自分の英語力は未熟であることがわかり落ち込みました。次の日から授業は始まり、私のクラスはさまざまな国籍の生徒が在籍しており、それぞれ英語の発音も違う中でペアワークやディスカッ

ションを行ないました。授業のなかでは、自分の国の文化やルールといった特色を紹介する機会もあり、初めて知ることも多く刺激を受けました。最初は自分の意見を言うことに恥ずかしさもありましたが、授業を通してほかの生徒と意見を交換することが面白いと感じるようになりました。また、クラスでの活動を繰り返していくと、自分から積極的に英語を話せるように変わっていくのを実感することができました。こうして、いつのまにか学校に行くことが私の楽しみにもなっていました。そして私は、国籍が違っても、英語ひとつでつながることに強く感銘を受けました。

この研修に参加するにあたって、多くの経験をしました。その経験から特に感じたことは、自分から行動することの大切さです。最初は臆病になってしまっても、なにか行動することで変わります。新しい自分に出会い自分に自信が持てるようになります。私は、この研修で英語はもちろん、イギリスの文化に触れそして自分の知らない部分を発見できました。この研修で学んだことを今後の人生に活かしていきたいです。

Milner School のクラスメイト（本人中央）

CanCam プロジェクトを終えて

3 年　永山　果奈

校内に貼られている CanCam プロジェクトのポスターを見て初めてこのプロジェクトの存在を知り、大学生活でしかできないことをしようと思ったのがきっかけで、参加することを決断しました。編集長として CanCam 編集部の方々また約 40 人のメンバーと活動していくことが面接で決まり、不安とワクワク感で最初の打ち合わせをしたのを覚えています。プロジェクト内容としては、主にオープンキャンパスに来る高校生をターゲットに、宮学や宮城また仙台の良いところなどを載せたフリーペーパーを作成するというものでした。

プロジェクトが始まると、企画会議や取材、原稿執筆、デザインの確認などを約 4 ヶ月の期間でこなさなければならず、活動量もスケジュール的

小学館の CanCam 編集部に訪問した時（本人左）

にもハードでした。さらに、期間が近づくにつれ、膨大な量の原稿が送られてくるので、その原稿の言い回しや表記方法などを一つひとつ確認するなどの細かい作業がとても大変でした。その分、冊子が完成し見たときの感動は、本当に素晴らしいものでした。頁の構成や写真の配置など、CanCam 編集部の方々にも手伝っていただきながら、宮学生の目線から見た宮学や宮城また仙台を冊子を通して伝えることができたと思います。

このプロジェクトを通じて、たった 1 頁にどれだけの時間と労力がかかっているかを、身をもって知ることができました。また、みんなで一つの目標に対して活動することは、大変ではありますが、それ以上に達成したときの達成感や感動はとても大きいものであることを、改めて知ることができました。大学生活でこのような経験をすることができ、本当に良かったと思います。大変貴重で素晴らしいプロジェクトでした。

ご退職に寄せて

Retirement

Professor Masashi Suzuki

The whole department would like to say a very sincere, “Thank-you” to Professor Masashi Suzuki who will be retiring from his position as specially-appointed professor（特命教授）on March 31st 2020.

In total, Professor Suzuki has been with the department for $10^{1}/_{2}$ years. He is a highly respected member of the English department, Miyagi Gakuin Women’s university and within British literature research circles. His expertise within this field has benefited so many of our students over his time here.

We all wish him health, happiness and continued satisfaction from his research for many years to come.

John Wiltshier

Head of the English Department

2019年度英文学科活動報告

2019 年教員研究・教育活動報告

遊 佐 典 昭

研究活動

研究課題「文法性の錯覚から見た第二言語処理の解明と、その英語教育への応用」（科研基盤（B））が 3 年目を迎えた。今年度は、研究成果の発表に力点を置き、国内外の研究発表に加えて論文の執筆を行った。この過程で多くの興味ある知見が得られたため、来年度以降の研究に繋げる予定である。また、海外の研究者との新しいネットワークも構築でき、共同のプロジェクトを来年度から実施する予定である。さらに「日本人英語学習者が不得手な目的格関係代名詞と関連構文の指導法開発」（挑戦的萌芽研究）は研究最終年度であり、英語教員が利用できるように研究成果をまとめ出版した。また、今年度から新しい分担研究も始まり、研究の基盤作りを行った。

論文

1. Otaki Koichi, Koji Sugisaki, Noriaki Yusa and Masatoshi Koizumi（in print）. “Two Routes to the Mayan VOS: From Evidence from Kaqchikel,”『言語研究』. 日本言語学会
2. 遊佐典昭・大滝宏一（印刷中）.「Be 動詞の過剰生成と時制の獲得」.『第二言語習得研究モノグラフシリーズ 4』. くろしお出版.
3. 遊佐典昭（2019）.「生成文法に基づいた第二言語獲得研究と外国語教育のインターフェイス」. 西原哲雄他（編）『言語におけるインターフェイス』. 250–275. 開拓社.
4. 遊佐典昭（2019）.「目的語関係節の指導案-言語理論・言語獲得・言語処理研究の観点から―」. 野村忠央他（編）『学問的知見を英語教育に活かす』. 79–94. 金星堂.

学会発表

1. Otaki Koichi, Manami Sato, Hajime Ono, Noriaki Yusa, Koji Sugisaki, Soana Kaitapu, Ana Heti Veikune, Peseti Vea, Yuko Otsuka and Masatoshi Koizumi（2019）. “The Ergative Subject Preference in the Acquisition of Wh-questions in Tongan,” *The 44th Boston University Conference on Language Develop-*

ment, Boston University, November 9th 2019.

2. Otaki Koichi, Manami Sato, Hajime Ono, Koji Sugisaki, Noriaki Yusa, Soana Kaitapu, Ana Heti Veikune, Peseti Vea, Yuko Otsuka and Masatoshi Koizumi (2019). "The Acquisition of Wh-questions in Tongan: A Comprehension and Eye-tracking Study," *Crosslinguistic Perspectives on Processing and Learning* (*X-PPL*), University of Zurich, November 5th 2019.
3. Yusa Noriaki and Koichi Otaki (2019). "*Be*-Support in Second Language Acquisition: A Preliminary Study," *14th Generative Approaches to Language Acquisition* (*GALA 14*), University of Milano-Bicocca, September 12th 2019.
4. Kim Jungho, Koizumi Masatoshi, Chigusa Shinichi, and Yusa Noriaki (2019). "How the Brain Processes Word Order in Japanese Sign Language: An fMRI Study," *25th Architectures and Mechanisms of Language Processing*, Higher School of Economics, Moscow, September 7th 2019.
5. Yoshimura Noriko, Minehara Nakayama, Atsushi Fujimori and Noriaki Yusa (2019). "Syntactic Knowledge and Context Sensitivity: Evidence from Japanese EFL Learners on the Processing of Raising Constructions in English," *The Japanese Society for Language Sciences*, Tohoku University, July 7th 2019.

社会活動

1. 日本英語学会理事、評議委員
2. 日本第二習得学会顧問
3. 言語科学学会企画委員

科学研究費の受領

1. 「文法性の錯覚から見た第二言語処理の解明と、その英語教育への応用」(基盤研究 (B)、代表)
2. 「日本人英語学習者が不得手な目的格関係代名詞と関連構文の指導法開発」(挑戦的萌芽研究、代表)
3. 「OS 言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド認知脳科学的研究」(基盤研究 (S)、分担)
4. 「動詞先行型危機言語と日英語から見る身体運動・言語・認知の関係とその普遍性」(基盤研究 (B)、分担)
5. 「東アジア言語の文末共感プロソディに関わる神経可塑性：老年実験言語学研究拠点の形成」(挑戦的萌芽研究、分担)

教育活動

今年は、英文学科の『ことばと人間』『英語音声学』『Academic Reading』『英語学基礎セミナー』『生成文法』『卒業論文セミナー』、および他学科の『基礎演習』を担当した。全ての担当科目において、答えを見つけることよりも問いを発することに力点を置き、インタラクティブな講義を行った。その結果、例えば『生成文法』のクラスでは、学生が指名しなくとも自発的に発表を行うレベルにまで達し、受講生は、問いを発することが知識の定着にもつながることを実感したと思われる。

増冨和浩

研究活動

ここ数年、英語の派生名詞句および非派生名詞句を分析対象として、それらの統語構造の形成過程と、意味や発音との関係について研究を続けてきたが、昨年度からはこれらの研究で得られた成果を英語教育の現場にどのように還元できるかを検討し始めた。今年度はその方向性を維持しつつ、今後さらに研究上の視野を広げるために、新な研究対象の選定に取り掛かった。関連分野の研究者たちとの情報交換を通して、英語学（および言語学）の様々な研究対象の興味深さを再認識することとなり大いに刺激を受けた。具体的な研究対象の決定は来年度に持ち越すことになりそうであるが、新たな研究の準備を開始できたことには個人的な意義を感じた一年であった。

一方で、今年度は教務部副部長等、様々な学内業務に従事する機会が多く、当初の研究計画に遅れを生じ、具体的な研究成果としては例年を下回ったことは反省すべき点と考えている。来年度は、より効率的な研究活動を心掛けこの紙面を借りて多くの研究成果を報告できるよう努力したい。

論文

増冨和浩「英語の one 照応における不定代名詞 one の語法と統語特性に関するミニマリスト統語論的分析」『英文学会誌』第 48 号、宮城学院女子大学英文学会、2020 年 3 月。

社会活動

今年度は、年間を通してオープンキャンパスの学科担当として、高校生

とその保護者に対して本学科のカリキュラム構成、具体的な学習内容、および大学で学ぶことの意義について紹介するなどしたほか、本学ホームページにて、海外研修等の学科カリキュラムの実践状況について積極的に情報発信を行い、学外への広報活動に努めた。

教育活動

英文学科のカリキュラムのうち、1、2 年生を対象した科目に関しては、文法関連科目の指導方法の開発・改善を担当し、GT（grammar test）プログラムの運営を今年度も担当した。このプログラムは、英文学科生に要求される英語運用能力を保証するために、その基礎となる英文法力を養成することを狙いとしたものである。昨年度に続き今年度も入学者数が定員を大きく上回ったことでクラスサイズが大きくなり、例年同等の学習効果を上げることに多少の不安もあったが、前期末の英文法に関する到達度テストの成績はこれまで以上に向上し、GT プログラムが軌道に乗ってきたことを実感できる結果となった。

3、4 年生対象科目に関しては、英語学コース専門科目の「生成文法 3･4」、「英語学基礎セミナーⅠ・Ⅱ」、「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」を担当した。これらの指導を通じて、英語学で取り扱われる言語現象の中から、各学生が自ら設定したテーマで 3 年生後期の英語レポート（1,800–2,500 語程度）を仕上げ、その成果を卒業論文へと発展させることができるよう各学生に対して具体的・個別的な指導を行った。

John Wiltshier

研究活動

After the publishing of my textbook series in 2018, this year I was requested to do workshops at a variety of high schools and universities in Tokyo, Osaka, Kyushu and Okinawa. It has been a pleasure to work with so many dedicated teachers around Japan supporting them in their English teaching.

研究発表

Wiltshier, J.M.（2019, June）. “Appropriate gamification”. 2019 Okinawan Summer Language Teaching Symposium, Naha, Okinawa.

Wiltshier, J.M., & Tatsumi, R.（2019, July）. “Showing what successful language

learning looks like". Pearson Seminar for English Teachers, Tokyo/Osaka.
Wiltshier, J.M., & Helgesen, M.（2019, November）. "Classroom Climates & Managing Engagement-Firsthand". JALT International Conference, Nagoya.

教育活動

This year the Pearson Progress test was administered to all 1st and 2nd years in our department in April. The test is designed to be taken three times; once before starting in our department, again after one year and finally a third time at the end of the second year. This test measures listening, reading, writing, speaking, vocabulary and grammar. The test results will show the improvements being made by students in the department over the first two years of their course. This test is in addition to the TOEIC test which is also being administered once a year in April.

The English Speaking Lounge（ESL）in the department was expanded this year and is now available for students to use everyday.

鈴木雅之

研究活動

Palgrave Macmillan 社の新シリーズ Asia-Pacific and Literature in English: Enlightenment and Romanticism to Modernity の peer reviewers（general editorial board）のひとりとして、Alex Watson and Laurence Williams, eds., *British Romanticism in Asi*a（2019）の出版に携わった。前 BARS 会長の Ian Haywood 教授（Roehampton University）を TARS と東北大学英文科が共同で招聘（日本英文学会東北支部の助成を受けた）。10 月 25 日には "Thomas Macklin's Poets Gallery: Illustration and Terror in the 1790s" と題した Haywood 教授による大変刺激的な講演とセミナーの司会をつとめた。

東北 6 県と新潟県を含む 7 県に住む 17 世紀–19 世紀イギリス文学・文化研究者の会―東北ロマン主義文学・文化研究会（Tohoku Association for Romantic Studies, 略称 TARS）―の運営に携わっているが、7 月には、日本バイロン協会との合同シンポジュウム「ロマン主義文学に見る異国表象――サウジー、オーエンソン、そしてロード・バイロンの場合」を開催。12 月の例会においては、"The Pre-Romantic Sublime and the English Revolution: Poetry of the 1650s" と「ブレイクとスヴェーデンボリ」と題した発表

を聞いた。同じく 12 月には論文 4 篇を収めた TARS 機関誌『東北ロマン主義研究』第 6 号（*Tohoku Romantic Studies*, No. 6）を編集・発行。その他の TARS の活動については HP を参照。

論文

1. 「『見えざる世界の証明』―スヴェーデンボリ、ブレイク、エマソン」、吉川朗子・川津雅江編『トランスアトランティック・エコロジー』彩流社、2019 年 10 月、19–47 頁。
2. 「“foundations for grand things”――ブレイクとスヴェーデンボリ」『東北ロマン主義研究』第 6 号、2019 年 12 月、35–50 頁。

その他

「幻の古代ブリトン人」『日本ジョンソン協会年報』第 43 号、2019 年 7 月、2–5 頁。

講演

「イギリスの四季をうたう」宮城学院同窓会 英文コース会 2019 年 10 月 26 日。

社会活動

日本英文学会東北支部理事
東北ロマン主義文学・文化研究会（TARS）代表

科学研究費

古事物愛好主義（Antiquarianism）とイギリス・ロマン主義文学・文化の研究（基盤 C、代表）

教育活動

「英米文学講読」では *A Flower Garden of English Poetry*（Eiko-sha, 2008）を使用テクストとして、英米詩を毎回数名の担当者を決め発表してもらった。作品を声に出して読み、英語を文法的に正しく読み日本語訳を付すことを基礎作業とした。出席者は担当者の発表に対しては必ずコメントすることを義務とした。発表を聞いてコメントすることは 2 年生にとっては想像以上に難しく高いハードルだが、少しずつ良いコメントがでるようになった。「英文学史 I, II」では、時代の流れ（政治・経済・宗教）と文学

作品の相関関係に注意を払いながら、時折 DVD による文学作品の映画(『ロミオとジュリエット』、『フランケンシュタイン』）を挟み、Chaucer から T. S. Eliot までを前期と後期とに分けて講義した。前期・後期それぞれの期末試験の前に中間試験を入れることで、1 回の試験範囲が短くなった。また *Hamlet*（1606）と *Frankenstein*（1816）を読み日本語によるレポート（A4 で 3 枚）を課した。「英米文学・文化研究セミナー」では、新たに Charlotte Smith, *A Natural History of Birds*（1807）（プリント）を精読。英語は大学院レヴェルの難しい作品なので先ずは文法的に正確に読む訓練をした。詩と科学（博物学 Natural History）というふたつの文化の衝突と融合がどのような表現を生むかを学生とともに考えてもらった。他学科にむけた「教養講義 B（外国文学)」（前期）では、英文学の中核を占める（占めていた）詩に焦点を合わせ、その歴史的流れと多様性を分かり易く解説し英文学の特徴と魅力について講義した。

吉村典子

研究活動

2017 年に出版した拙著『ウィリアム・ド・モーガンとヴィクトリアン・アート』について、意匠学会より本年度学会賞を受けた。

この出版後に着手した戦後美術研究も順調に進んできた。リチャード・ハミルトンについて、昨年度口頭発表したテーマを本年度論文に脱稿したほか、新たなトピックで美術史学会等で口頭発表を行った。

学会口頭発表 / 招聘講演会

吉村典子 「1956 年『これが明日だ』展再考 ― Group 2 の展示を中心に」美術史学会全国大会、京都工芸繊維大学、2019 年 5 月

――.「ジョン・ヴェルカーの空間計画」意匠学会全国大会、滋賀県立大学、2019 年 8 月

――.「世紀転換期の英国デザイン」独仏語圏文化学研究会、大阪市立大学、2019 年 12 月（招聘）

――.「『これが明日だ』展の “Pop” と “Op”― 戦後イギリスの展示文化 ―」宮城学院女子大学人文社会研究所第 28 回公開講演会、2020 年 1 月

科学研究費の受領

基盤研究（C）代表
「リチャード・ハミルトン研究　―ニューカッスル時代を中心に―」

社会活動

意匠学会・国際交流委員　　編集委員
意匠学会『デザイン理論』投稿論文・査読
美学会『美学』投稿論文・査読
「ウィリアム・モリス研究会」運営・実行（12 月 21 日）

教育活動

学内では、本誌巻末の「講義題目」の科目を担当した。校外実習では、海外研修（イギリス、学生 45 名参加）と国内研修（福島、学生 89 名参加）を Wiltshier 教授と木川副手とともに運営した。

これらの授業や実習の他には、展覧会「Portrait of Britain」を Wiltshier 教授とともに監修した（2019 年 10 月 16 日―10 月 26 日、於：宮城学院礼拝堂、好評につき 11 月 5 日まで会期延長）。日常の英国を捉えた写真を中心に展示し、英国に因んだ茶の関連イヴェント 4 種を行った。写真撮影は木川奈緒氏（英文学科卒、企画編集会社勤務を経て、現在英文学科副手）、茶事は古山くみ氏（英文学科卒、航空会社勤務を経て、現在紅茶教室主宰）が担当した。本学学生・教職員をはじめ、会期中は、大学祭、オープンキャンパス、英文コース会等もあり、学外からも多くの方々にご来場いただいた。企画・運営・実行に尽力くださった古山、木川両氏に、感謝の意を表したい。

2019 年度開講　英文学科講義題目

英文学科専任教員

遊佐典昭
ことばと人間
英語音声学
生成文法（2 年生）
Academic Reading
英語学基礎セミナー

増冨和浩
Grammar（1 年生）
Grammar（2 年生）
生成文法（3 年生）
英語学基礎セミナー

John Wiltshier
Speaking（1 年生）
Speaking（2 年生）
Writing　（1 年生）
Listening & Vocabulary（2 年生）
イギリスの生活と文化
英語教育　　（TESOL）
英語学基礎セミナー

鈴木雅之
英米文学講読　（詩・演劇）
イギリス文学史
英米文学・文化基礎セミナー
英米文学・文化研究セミナー

吉村典子
イギリスの生活と文化
Intensive Reading（2 年生）
イギリス文化史
Academic Reading
英米文学・文化基礎セミナー
Overseas Study Preparation
Overseas Study

Cory Koby（前期）
Reading Activity（1 年生）
Listening & Vocabulary（1 年生）
Listening & Vocabulary（2 年生）
Academic Writing & Presentation
Discussion Seminar
文化研究（オーストラリア・カナダ）

田島優子
サバティカル

非常勤教員

王　軒
外国語としての日本語

岡田　毅
コーパス言語学

金子義明
Grammar（2 年生）
英語学研究セミナー

菅野幸子
文化交流論

菅野雅代
Listening & Vocabulary（1 年生）
Listening & Vocabulary（2 年生）

木村春美
英語学研究セミナー

木山幸子
心理言語学
日英語対照研究
語用論

久保田佳克
Writing（1 年生）
Intensive Reading（1 年生）

熊谷優克
英米文学・文化研究セミナー

小泉政利
日英語対照研究
心理言語学

越川芳明
英米マスメディア論

佐々木誠逸
Writing（1 年生）
Intensive Reading（2 年生）

佐藤智子
Intensive Reading（1 年生）
英米文学の世界（19–21 世紀）

佐藤　恵
英米文学講読（小説・批評）

島　越郎
Grammar（1 年生）
Grammar（2 年生）

清水菜穂
アメリカ文化史
アメリカ文学史
英米文学・文化研究セミナー

杉山　恵
Writing（1 年生）

鈴木美津子
英米文学の世界（15–18 世紀）
Academic Reading
英米文学・文化研究セミナー

鈴木　渉
英語科教育法（2 年生）

髙橋久子
Intensive Reading（1 年生）
Writing（2 年生）

千種眞一
英語の歴史

那須川訓也
英語学研究セミナー
社会言語学

福地和則
教職実践演習（中・高）
英語教材研究
英語科教育法（3 年生）

藤田　博
英米文学・文化研究セミナー

渡邊真由美
英米文学・文化基礎セミナー
英米文学・文化研究セミナー

Cory Koby（後期）
Reading Activity
文化研究（オーストラリア・カナダ）

Robert Green
アメリカの生活と文化
Writing（2 年生）

Barry Kavanagh
Speaking（1 年生）
Speaking（2 年生）

Bruce Leigh
Writing（1 年生）
Writing（2 年生）
Academic Writing & Presentation

Jerry Miller
Speaking（1 年生）

Alison Kate Nemoto
Listening & Vocabulary（1 年生）
Speaking（2 年生）

Tomomi O'Flaherty
Writing（2 年生）

Anne Thomas
Academic Writing & Presentation
英米文学・文化研究セミナー

Alex Write
Speaking（2 年生）
Writing　（2 年生）
Reading Activity（2 年生）

Patrick Conaway
Speaking（2 年生）
Academic Writing & Presentation

Jessica Takeda
Writing　（1 年生）
Speaking（1 年生）

2019 年度　英語英米文学専攻講義題目

英文学科専任教員

鈴木雅之
英文学演習

吉村典子
英米文化論特殊講義（文化史）

非常勤教員

佐藤智子
米文学演習

Bruce Leigh
英語アカデミックライティング

2019 年度　卒業論文題目

❀ 遊佐ゼミ（英語学）

石川　　舞 ・・・・・・形態論の観点からカレーライスとライスカレーの文法的違いについて考える

伊勢みなみ ・・・・・・不定詞節が疑問詞の移動先に現れる仕組み－名詞的用法の不定詞を不定詞の原義から考える－

加川　美結 ・・・・・・韓国人学習者の英語 /f/ の発音が /p/ になる理由：Feature Geometry を用いた素性階層理論からの考察

菊地　　奏 ・・・・・・なぜ否定疑問文と肯定疑問文を使い分けるのか？

熊谷　奏里 ・・・・・・英語の第二言語学習者は三人称単数現在形－ s をなぜ落とす？：普遍文法が働く分析から

佐々木　華 ・・・・・・日本人英語学習者による Tough 構文の獲得

佐藤　愛香 ・・・・・・進行相の日英語比較に関する研究

前後　　光 ・・・・・・否定極性表現における認可条件：統語的分析と意味論的分析の問題点について

千葉美紅理 ・・・・・・The usage of indefinite articles in English

藤嶋　弓桂 ・・・・・・What makes it difficult to learn the Raising Construction : Intervention effects of experiencer phrase

❀ 増冨ゼミ（英語学）

井上　歌穂 ・・・・・・英語受動文の構造に関する統語論的研究

内海　幸奈 ・・・・・・Be 動詞の過剰生成

遠藤　もも ・・・・・・外来語及び和製英語が英語学習にもたらす影響

宍戸ありさ ・・・・・・英語における時制とアスペクトの定義とその分類

菅原　　萌 ・・・・・・英語の音節構造とアクセント配置の関係

鈴木　香菜 ・・・・・・英語の接辞について

鈴木　梨菜 ・・・・・・日本人英語学習者が間違いやすい冠詞の用法について
三浦　千紘 ・・・・・・英語の語強勢付与規則について
村上野乃香 ・・・・・・On English Accents and Dialects: A Comparison between RP and Manchester English
柳澤　里穂 ・・・・・・日英語における敬語表現の比較

❄ Wiltshier ゼミ（英語学）

阿部奈津子 ・・・・・・Attribution Theory: Whether Western Attribution Theory Can Be Used to Explain the Motivation of Students in Japanese English Education
高橋あかり ・・・・・・Research into the Benefits of Teaching English in English : Class Observation and a Mock Lesson
高橋　慶香 ・・・・・・What kind of discussion class is effective for the improvement of English speaking skills?
村田　里穂 ・・・・・・Interactive teaching and teacher's changing role in the English conversation classroom in Japan

❄ 鈴木雅之ゼミ（英米文学）

阿部　碧依 ・・・・・・ロマン主義時代の詩人たちと「鳥」―Wordsworth, Keats, Shelley―
石井　　星 ・・・・・・Christina Rossetti の詩にみる自然観
大槻　紗雪 ・・・・・・孤独と美―トマス・ムーアの描く自然
渋谷　知花 ・・・・・・“Lucy Poems” にみる Wordsworth と Lucy の関係性
菅原　知海 ・・・・・・ワーズワスの自然観
武山　優衣 ・・・・・・王党派詩人ロバート・ヘリックの詩―生と死について
山口　夏海 ・・・・・・『ゴブリン・マーケット』におけるヴィクトリア朝時代の女性像の理想と現実

❄ 鈴木美津子ゼミ（英米文学）

市川真優花 ・・・・・・『ジェイン・エア』に描かれた女性の状況

一条　瑞希 ・・・・・・『ティファニーで朝食を』に見られる動物のイメージ

猪俣　　栞 ・・・・・・『若草物語』に描かれた女性像

岩村　美歩 ・・・・・・『ジェーン・エア』（*Jane Eyre*）に描かれている屋敷の意味

奥山　莉央 ・・・・・・On Doubles in Poe's "William Wilson" and Capote's "Miriam"

後藤　舞子 ・・・・・・『嵐が丘』における母と娘の関係性

説田　芙実 ・・・・・・祖国の若さを熱病と皮肉った二人のアメリカ人作家－ヘンリー・ジェイムズとイーディス・ウォートン

寺田　茉由 ・・・・・・『グレート・ギャツビー』のアメリカン・ドリームについて

矢部　結愛 ・・・・・・『グレート・ギャツビー』に見られる女性観について

❄ 吉村ゼミ（英米文化）

児玉紗也加 ・・・・・・ウィリアム・モリスの芸術思想

阿部　有紗 ・・・・・・ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの美の価値観とは～≪モンナ・ヴァンナ≫を通して～

岩崎奈津美 ・・・・・・The Development of Tea Culture in Britain, 1660-1900

大沼　桃子 ・・・・・・19 世紀の英国喫茶文化

加藤　百香 ・・・・・・テューダー朝の絵画～エリザベス 1 世の肖像画の特質～

加藤　志菜 ・・・・・・Women's Beauty: John William Waterhouse and His works

岸野　奈緒 ・・・・・・英国の喫茶文化の展開～日本・中国からの茶道具の影響を交えて～

木村　洋香 ・・・・・・ウィリアム・ホガースの思想と表現－人物像を中心として－

小林　結乃 ・・・・・・ウィリアム・ホガース「勤勉と怠惰」－画と文字言語の関係性について－

佐藤初乃華 ・・・・・・D.G. ロセッティ≪ダンテの夢≫における表現の展開－1856 年版と 1871 年版を比較して－

佐藤　そら ・・・・・・ヨーロッパの扇文化の特質～言葉と装飾をめぐって～

高橋安里沙 ・・・・・・British Houses: Opening Own Houses Means Opening Own Life

千葉友紀子 ・・・・・・イギリスの茶文化－セイロンとの関係を中心に

内藤佳奈子 ・・・・・・シェイクスピアとグローブ座－どのようにしてイギリス演劇を発展させたか－

松木　紀花 ・・・・・・人間と自然～ヴィクトリア朝の庭園を巡って～

渡邉　夏海 ・・・・・・パブリック・スクールとスポーツ－ゲームが教育に取り入れられるまで－

英文学会活動報告

2019 年

4 月 12 日　「はじめての TOEIC」（1 年生対象）
佐藤明宏氏

6 月 8 日　TOEFL ITP テストスキルアップセミナー
鬼頭和也氏

6 月 17 日　英文学科 OG による就職講演会①
「バイリンガルエンジニア」
田山優美氏

7 月 4 日　声と話し方講座（前期）1 年生コース
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」
赤間裕子氏

7 月 9 日　英文学科 OG による就職講演会②
「ワーキングホリデー」
高橋美晴氏

10 月 16 日～ 11 月 7 日　英文学科企画写真展
「Portrait of Britain」

10 月 17 日　英文学科 OG による就職講演会③
「航空業界、紅茶教室主宰」
古山くみ氏

11 月 7 日　声と話し方講座（後期）1 年生コース
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」
赤間裕子氏

11 月 1 日、8 日、15 日

声と話し方講座（2・3・4 年生対象）

「面接対策・話し方実践コース」

赤間裕子氏

English Certification
―私の勉強法―

Keeping up the efforts

4 年　高橋あかり
TOEIC スコア：885

私は 1 年次にこれを書いたとき、「大学卒業までに 900 点を超えよう」と強く思いました。それからイギリスへの短期留学や教育実習、教員採用試験（教採）を経て、目標まであともう一歩というところまでたどり着きました。ここでは、私の TOEIC に向けた勉強方法やこれまでの英語勉強法を振り返りたいと思います。

まず、教採を受けるにあたり、TOEIC で高得点を取ると非常に有利になることがわかり、3 年次の後期に留学してから間もなく公開テストを受けることにしました。基礎ゼミの 10 枚レポートの提出や英検準 1 級に向けた勉強、そして教採対策が進んでいないという焦りもありましたが、なんとか勉強時間をつくって 865 点を取ることができました。実際にこの点数だと、私が受けた自治体のうち一方では英語試験の加点対象になり、もう一方では英語試験自体が免除になりました。帰国してから TOEIC の勉強に割けられる時間は少なかったので、1 日 10 分でできる問題集 1 冊を極めようと思いました。それだけでは本番で集中力が続かないため、リスニングとリーディングを通して解くのも何回かやってみました。4 年次 10 月の公開テストに向けた勉強でも、自分のレベルに合った問題集 1 冊をこなし、模擬テストに数回取り組みました。

英語の勉強について、留学したこと以外は特に大きなことをやっていないのですが、心掛けていたのは、帰国してからも常に英語に触れるようにすることです。毎週のゼミや ESL で英語をたくさん聞いたり話したり、教採勉強の息抜きの洋楽・洋画鑑賞、外国人の友達と英語でのチャットや交流など……他にやることがいっぱいあっても、「気づけば英語に触れて

いる」という状態にあったと思います。もちろんそれだけでは英語力は向上しませんが、小さなことでもずっと続けていくこと、努力し続けることが大切だと考えています。私は卒業して教師になってからも学び続け、専門性を磨いていきたいと思っています。そして、生徒たちに英語を学ぶ楽しさを伝えていきたいです。

留学で培った英語力

3 年　堀　真奈衣

TOEIC スコア：765

私は昨年の 8 月から今年の 5 月まで、本学の交換留学制度を利用してアメリカに 9 ヶ月間留学しました。今回、TOEIC765 点を取得することができましたが、TOEIC を受ける何週間か前からあるいは前日に TOEIC 対策をしたかと聞かれると、全くしなかったのが事実です。ただ、昨年留学前に受けた際は、対策本を読んだりして TOEIC の傾向を学び、出やすい単語を勉強したりはしました。しかし、今回は留学から帰ってきて 1 度目だったので、自分の今持っているレベルを試そうと決めていました。そのため、日頃の英語学習以外に、特別な対策は行いませんでした。765 点を取得した前回より 130 点も上がっていたので驚き、とても嬉しかったです。留学中、私は英語だけの環境で学びました。教科書はもちろん全て英語でしたし、先生が話すことも全て英語でした。ついていくことはそれほど厳しいものではありませんでしたが、しかし、わからない単語や言い回しなどはたくさんありました。ですがその度に注意して聞くことで、覚えていくことができました。リスニング力については、授業を聞くことに加え、友達同士でのご飯を食べながらの会話でも、培えたかと思います。聞く言葉が常に英語だったというのは、とても大きいです。またリーディング力につ

いては、リーディングのクラスを受けたことが大きいと思います。問題も全て英語だったので、わからない単語を何度も調べていくうちに、調べずともわかるようになったものが多いです。そして、現地の学生と一緒に文学の授業を取っていたので、1 年間を通して 3 冊の厚い英語の本を読みました。難しい、たくさんの細かい感情が描かれた英語で語られていたので、とても大変でしたが、なんとか読むことができました。わからないところを全て調べるのは不可能だったので、大事なポイントを掴むようにして読んでいました。これは、TOEIC のリーディング項目でも大事なことではないかと思います。また、授業以外でも全ての情報が英語だったので、TOEIC の問題にある情報の読み取りなども、以前と比べてすらすらと分かったと思います。留学のおかげで、英語力がぐんとあがったということが、今回のこのスコアを通じて実感できたのでよかったです。

私の英語学習法

4 年　松下　未来

TOEIC スコア：735

今回、TOEIC を受験する前に、問題集を解いたり解説を読んだりするなどの特別な試験対策は特に行いませんでしたが、昨年よりもスコアが上がりました。それは、私が常日頃意識していることが TOEIC の結果にも表れたのだと考えています。

まず、毎日少しでも英語に触れることを意識しています。具体的に言うと、スマートフォンの言語設定を英語に設定しています。スマートフォンは今や私たちの生活にはなくてはならないものと言っても過言ではありません。音楽を聴いたり、友人と連絡を取ったり、調べ物をしたりと様々な用途で使用するスマートフォンを英語に設定してしまえば、必然的に毎日

英語に触れるしかない状況になります。新しい機能が追加されどうしても意味がわからない時は、検索サイトで日本語で調べれば大方解決できますが、元々直感的に操作ができるよう作られたもので、それほど支障になることはありません。唯一困ることといえば、日本語の名前で認識しているゲームのキャラクターの名前が、英語では全く違う名前になってしまうことです。

もう一つ私が意識しているのは、楽しみながら英語に触れることです。例えば、洋楽や英語のラジオを聴いたり、動画を見たり、外国の著名人のツイートを読んだりするだけでも英語に触れることができます。YouTube には、アメリカやイギリスのテレビ番組の公式アカウントが載せている動画がありますし、他の動画配信サービスを利用して、海外のドラマを見ることもできます。音楽にしても動画にしても、聞き取れないときは歌詞や字幕を見て、意味がわからない単語は辞書で調べるようにしています。テレビで映画が放映されることがありますが、そのときによく行うのは、字幕を付け音声は英語に切り替えることです。特にディズニー映画は、英語がわかりやすく見やすいように思います。

見る聞く以外であれば、英語の記事を読むこともします。ただ、英語のニュース記事や TOEIC の長文問題のような文章だけではなく、映画の評論やゲームの解説記事も含みます。自分が見た映画の評論を読むと、違う文化を持つ外国人ならではの視点に気付かされることがたくさんあります。ゲームの解説記事は、純粋に楽しんで読むことができます。スマートフォンを使ってインターネットの記事を読むことには、わからない単語をその場ですぐに調べることができる利点があると考えます。その単語は、単語帳アプリを使って保存しておけば、復習することもできます。

TOEIC には、英語力の他に集中力や判断力も必要だと考えます。その点については、対策としてある程度の勉強が必要かもしれませんし、実際に問題集を解く勉強をしたこともあります。しかし英語については、今回

スコアが上がったように、ただ机に向かうのではなく、楽しみながら日常的に英語に触れることで身につくこともあると考えます。

初めて受験する人の英語学習法

1年　泉　穂
TOEIC スコア：660

今回が初めての受験だったので、まず時間配分や注意事項を調べようと思いました。本屋に初めて受験する人のための参考書があったので、それを読んで試験に臨みました。大問、1問にかけられる時間が細かく書かれていたので、それを覚えて時計を見ながら解きました。受験後に友人が、時間が足りなかったと言っていたので、調べておいてよかったと思いました。そして、試験には時計がなかったので、場所ごとに違うと思いますが、腕時計を持っていると便利だと思います。また、禁止事項を前もって知っていることで、当日焦らずに試験に集中することができたと思います。

リスニングは、主に勉強せず問題を見るだけにしました。英語の指示文というのが最初に放送されるので、それを予め知っておいてその時間に写真をみたり文章を読んでいたりしました。特にパート3からは難しくなるので、問題文を先に呼んでおくのがすごく重要になってくると思います。したがって、指示文を把握しておくのも大切だと思います。リスニングは、指示文の間に問題をある程度理解しておき、話し始めたら聴くことに集中するのが大事だと今回の試験で思いました。

リーディングについてですが、私は、文法が高校時代から苦手だったので文法を一番勉強しました。パート5と6は、文法を理解していればすぐにわかる問題が多いので、文法、特に時制を勉強するといいと思います。なるべくパート7に時間を残したかったので、5と6は深く悩まずに解き

ました。しかし、試験が終わって気づいたことがあります。それは語彙力の少なさです。パート 6 の後半あたりから知らない単語が増えてきます。特に話の展開を変える副詞がわからないと、中身の理解がまったく変わってくるので、単語を覚えることが大事だと思いました。パート 7 の長文自体は時間があれば解けるので、前の問題で時間を余らしておいて、パート 7 でいっぱい使えるようにするのがいいと思います。試験前に単語を覚えておくのが一番いいのですが、もしわからない単語に出会った場合は、そこを飛ばして読んでみるのもいいと思います。全体を理解してからわかる単語もあると思います。パート 7 はいろんなパターンの文章が出てきます。例えばメールや広告などです。どんな問題かを知っておくために、いろんな種類の問題を参考書で解くのがいいと思います。人によって苦手分野は違うので一概には言えませんが、どんな問題が出るのかを知っておくのは大事なことだと思います。

小さな努力の積み重ね

3 年　武田　蒼生

特に目標を立てることもなく、大学一年生の時は「TOIEC の問題形式を掴もう」というくらいの気持ちで臨んだため、初めての TOIEC に向けての勉強は全くしませんでした。そのため、自分の実力がはっきりと分かり、英文学科生としてこのままのスコアでは恥ずかしいと思い、もっとスコアを伸ばすべきだと思うようになりました。しかしその一方で、いったい何をすれば良いのか分からないというのが正直なところでした。そのため私は、出来るだけ毎日英語に触れようと決めました。そこで実行した二つのことについてまとめようと思います。

まず一つ目は、授業の課題である Word Engine です。一年生から大学二

年前期までの設定されていた週目標は 300 でした。ですが私は、大学一年生の後期あたりから一日で 300 ワードを毎日やって、週で 2,100 ワードやることを自分の目標に掲げていました。一般的に、語彙力は Reading だけでなく Listening や Speaking、Writing など英語力全てに欠かせない力と言われています。そのことを信じた私は、コツコツと毎日取り組んでいました。

二つ目は、Reading です。こちらも授業の一環で取り組んでいるものであり、毎週最低ワードが決められています。大学一年生の最初の頃は、「最低ワードを少し上回れればいいや」くらいの気持ちでした。ですが、いつの頃からか覚えておりませんが Reading そのものが楽しく、全く苦に感じませんでした。そしてここでの自分の設定した目標は、「必ず前の週の自分のワードを超える」ということです。一年生の頃は、易しいレベルの本を出来るだけ多く読むことを続け、今では当時では考えられなかった語数の本を選んで読むことが出来るようになりました。

最後に、学習に楽しんで取り組む、嫌々やらないことが大事だと感じます。事実、私は先に述べた二つのことを楽しんでやっていました。朝型人間の私は、これらを夜にやるのではなく朝にやっていました。5 時には起きて、Word Engine の自分の目標語数をやり終えたら Reading の本を読むという生活を続けています。こうした小さな努力の積み重ねが、今年受験した TOIEC のスコアが上がったことに繋がったのだと思います。それぞれ自分に合う勉強方法があると思いますが、これが私にとって最適な勉強法であり、これからも続けて更なる TOIEC のスコアアップに繋げたいです。

English Certification A・B・C

「English Certification　A・B・C」は TOEIC 等のスコアや英語関係の検定試験合格等により単位を認定する制度です。

2015 年度以前の入学者は TOEIC のみが単位認定の対象でしたが、2016 年度以降の入学者より下記の英語検定が単位認定の対象となります。

	TOEIC	**英検**	**TOEFL paper**	**TOEFL iBT**	**IELTS**
English Certification A	600 以上 720 未満	2A 級	500 以上 550 未満	65 以上 79 未満	5.5 以上 6.5 未満
English Certification B	720 以上 830 未満	準 1 級	550 以上 600 未満	79 以上 96 未満	6.5 以上 7.5 未満
English Certification C	830 以上	1 級	600 以上	96 以上	7.5 以上

2015 年度以前の入学者で TOEIC 600 点以上～ 730 点未満の単位申請者：
児玉紗也加（4 年）

2016 年度以降の入学者で English Certification A で単位申請者：
高橋芽以（3 年）、水沼歌倫（3 年）、宍戸ありさ（4 年）

編集後記

『英文学会誌』第 48 号をお届けします。お忙しいなか原稿をお寄せ下さった方々に心から御礼を申し上げます。英文学科の有力な宣伝媒体としての本誌は各地の高等学校にもっと送付してもよいのではないかという話が編集委員会でありました。送付先を再検討する時期にきているような気がします。わたしが本誌の編集に携わるのも今号が最後となりました。6 年前の第 42 号を退職記念号としていただいたその時と本号と併せて 2 度もジョン先生からは退職祝いのお言葉を頂戴しました。10 年半の在職期間でした。大変心地よく過ごさせていただきまた沢山の活力もいただきました。心から感謝いたします。4 月からはいよいよ 'a Third Act of Life' です。英文学科のさらなる発展と本誌がより多くの人に楽しんでいただけるものになるよう期待しています。副手の木川奈緒さんには編集の段階で大変お世話になりました。

"Tomorrow to fresh woods, and pastures new"

編集委員　鈴木雅之

執　筆　者　紹　介

増　冨　和　浩　　宮城学院女子大学准教授

John Wiltshier　　宮城学院女子大学教授

木　川　奈　緒　　宮城学院女子大学副手

編集委員

John Wiltshier

鈴　木　雅　之

木　川　奈　緒（編集補助）

英　文　学　会　誌　　第48号

発　行　　2020　年　3　月　10　日

編　集　　代　表　John Wiltshier

発行所　　宮　城　学　院　女　子　大　学

学　芸　学　部　英　文　学　会

仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号

電話　（022）279-1331㈹

印刷所　　プ　リ　ン　ト　コ　ー　プ KOPAS

電話　（022）727-1760